

マイクロ・アグレッションと私たち

～分断から動き出す交流～ 9

朴 希沙(Kisa Paku)

この連載ではこれまで、マイクロアグレッションの概要について、様々な事例とともに紹介してきました。そしてそこから一歩進んで、在日コリアンのためのサポートグループ「それが一人のためだとしても（しよもの会）」の実践で見られた、自分とは異なる立場の人と出会った時に生じる感覚とその変化について表現してきました。

今回は、そのようなグループの活動を通して得られた、マイクロ・アグレッションと反対の概念、マイクロ・アグレッションを乗り越えるための実践である「Respectful Racial Dialogue（敬意に支えられた人種に関する対話）」について紹介したいと思います。自分の今いる現場や小さなコミュニティの中で、いかにマイクロ・アグレッショ

ンを乗り越えていくかを考える際に、ひとつの参考にしていただければ幸いです。

◎Respectful Racial Dialogue の前提

まず、この Respectful Racial Dialogue（以下、RRD）についてですが、これは実践の中で「よし、RRD をしよう！」などと言っていたわけではないことに注意を促しておきたいと思います。程度の差はあれ、どこでも人が集まりなんらかのグループ実践をしているところでは、同時多発的に様々なことが起こっていると思います。状況は複雑で入り組み、時にはちやめちやで、「対話実践」という名で状況を整然と整理

することなどできないのが実情ではないでしょうか。特に、私が参加していた「してもの会」では日々衝突や分かち合いや思わぬハプニングが起き、「敬意に支えられた対話」などどこ吹く風でケンカが勃発することもしばしばでした。

また、言葉による対話以外の要素も、互いを理解するためには非常に重要だと思います。それは一緒に食事をしたり、遊んだり、ただ歩いたり、言語的ではない（絵や音楽等）を作ったりする活動や、しょーもない冗談で笑ったりすることかもしれません。そのようなさもないことは、非常に重要でありながらも、この RRD には含まれていません。本当は、そのような「互いの関係を大切に思い、それを育む日常」そのものが生み出す力こそが、立場の異なる人々の関係を支え、困難を乗り越えていく原動力になると思うのですが、それだと他のグループに自分たちの実践を活かしてもらうためのヒントを伝えづらくなってしまいます。

そこで、私たちはそのような立場が異なる人々が織りなす「日常」そして「対話」の根底に一番重要なものとして「Respect（リスペクト、敬意）」を置き、自分たちの実践を整理してみようと思いました。

◎Respectful Racial Dialogue とは

RRD の特徴は、大きく分けると 3 つに表現することが出来ます。それは、

①人種や民族をはじめとする、互いの社会的立場に関する経験に対して意識的であ

ること

②苦闘する生に対する敬意

③応答しあう関係としての対話

です。

ひとつひとつみていきましょう。まずひとつめ、互いの社会的立場に関する経験に対して（あえて）意識的になろうということですが、これは、マイクロ・アグレッションにおける「無意識性」に対抗するものです。互いの立場や違いを曖昧にせず、むしろそれについて積極的に話し合うことに開かれている、という意味でもあります。

一般的には、「違い」はネガティブなものとして語られ、「同じ」ところを見つけようとするのが、グループや人間関係で多いのではないのでしょうか。それに対して、「してもの会」の会では“違いとか分断みたいなものがあるっていうことを踏まえるから、始まる交流がある”とし、“ほんとに人と人が出会う時って、違う部分をはっきりさせた方が出会える”といえます。

このようなことは、意外に感じるかもしれませんが、時に「同じ」だと思っているのはその場で権力を持っている人々、マジョリティの人々だけかもしれない、ということに注意を向ける必要があります。社会的に抑圧されている人々、差別を受けている人々は、日々「お前たちは同じではない」というメッセージを社会から有形無形の形で突きつけられています。そのような事実があるのに、その場でのみ「私たちは一緒だよ」と言っても、それは一種の欺瞞や

時に差別がある現状を隠蔽する取り組みになってしまい、本当の意味での人人との「出会い」や「交流」が妨げられてしまう可能性があるのです。

「してもの会」でも、このように言った人がいます。

Cさん：軽いノリの運動とか、軽いノリの社会、「私差別しないよ」って言うてくるような日本人とか、そういう軽い人たちの中で、たくさん殺されてきた在日(コリアン)の言葉がある。

ここで、“殺されてきた言葉”とは、その場で価値を認められず、時には存在すら認められずに表に現れ出ることができなかつたものではないでしょうか。そして、このように「言葉や表現を日々殺す」ことがマイクロ・アグレッション（特に、**Microinvalidation**：マイクロ・インバリデーション：マイクロな無価値化）の本質だと私は思います。それが一般的な人間関係や社会に溢れているからこそ、あえて私達は「意識する」必要があるのだと思います。正確に言えば、マジョリティや抑圧的な立場に立つ人は、その事実を意識しづらいために気をつける必要があるでしょう。

次に、苦闘する生に対して敬意を払おうということですが、これは、マイクロ・アグレッションにおける「曖昧な攻撃」に対抗するためのものです。自分ではそのつもりがなくても、無意識的に差別を内面化してしまい、それを相手に向ける。社会で権力がある側こそが優れているとして、相手を劣ったものとみなす。マイクロ・アグレ

ッションのひとつであるマイクロ・インサルト (**Microinsult**：マイクロな侮辱)にはそのような性質があります。

それに対し、主流文化や常識ではなく、社会的なものも含めた相手の状況に降り立ち、たとえ“評価者の目線に立てば非難されることであっても”、その人の状況に降り立てば“がんばってきたんじゃないの”と思えるような行為に対して敬意を示すこと、理解しようとすることを意味しています。

これは、一朝一夕にできることではなく、コミュニティやグループ、大切な人間関係において「どのように相手を理解するか」という時に重要になることだと思います。相手を理解する時に、自分はどの立ち位置に立っているのか？無意識的に何に価値をおいているのか？と問うことでもあります。「してもの会」では、一番大切なのは「常識」でも「誰かからの評価」でもなく、その人が置かれた状況の中で苦しみ、「がんばってきた」ことそのものではないかと考えてきたわけです。これが実現するためには、個々人のディティールに富んだ悩みを十分に聴き合う実践がいるでしょう。

最後に、応答し合う関係としての対話ですが、これはマイクロ・アグレッションにおける加害者と被害者とが陥る関係に対抗するためのものです。マイクロ・アグレッションでは多くの場合加害者に「自分には偏見や差別心などない」という信念が見られます。一方で、被害者は「曖昧な」差別に対し言語化したり判断したりすることを余儀なくされ、一種の「金縛り状態 (**Catch-22**)に陥るといわれています(**Sue, 2010**)。

それに対し、「応答し合う関係としての対話」とは、対話によって互いに変化することにかかっていることを意味しています。少なくとも、変化していこうと思えなければ、マイクロ・アグレッションを再生産してしまうどころか、過去起こったマイクロ・アグレッションについての対話すら出来なくなるでしょう。誰も完璧ではありません。しかし、この社会で無意識的に共有されている差別を、自分が行い続けるということも、いいわけではないでしょう。結局マイクロ・アグレッションを乗り越えていくためには、自分とともに社会が変わっていく、変えていくんだという根本的な態度が必要になるのだと思います。

以上、ざっくりとしたことになりましたが、マイクロ・アグレッションを乗り越えるために大切になると思う条件について述べました。コミュニティの中で、人間関係の中で、マイクロ・アグレッションをどうやって取り扱えばいいかわからない時、どう乗り越えていくか考える時、ひとつの参考にしてもらえればと思います。また実際どのようにマイクロ・アグレッションを取り扱ったのか、マイクロ・アグレッションについて対話することが出来たのかといった経験や実践を共有することができれば、とても嬉しいと思います。